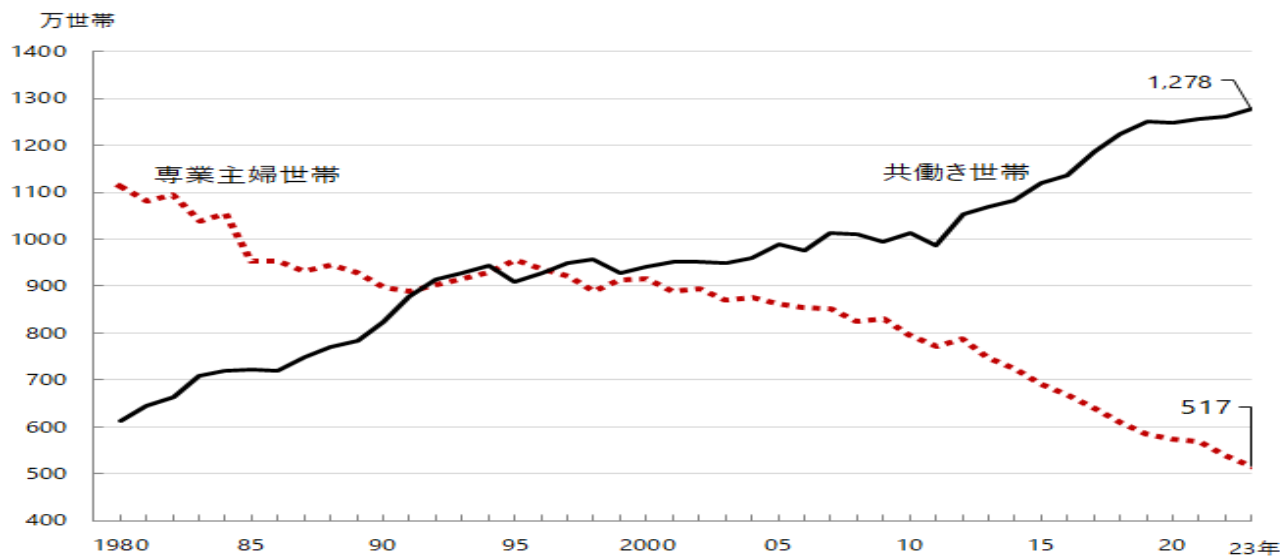


子育て意識・状況調査結果の「総括」

1. 親子の触れ合い

👉 他の調査結果に比べて、子どもと関わる時間「1時間未満」が多くなっている。この理由として、この令和6年調査では「一緒に遊ぶ」「話を聞く」「勉強を見る」などの文言が加わっていることが考えられる。ただし、その時間が短くなっていることも考えられる。

その背景として、共働き世帯の増加も考えられる。



資料出所:総務省統計局「労働力調査特別調査」、総務省統計局「労働力調査（詳細集計）」

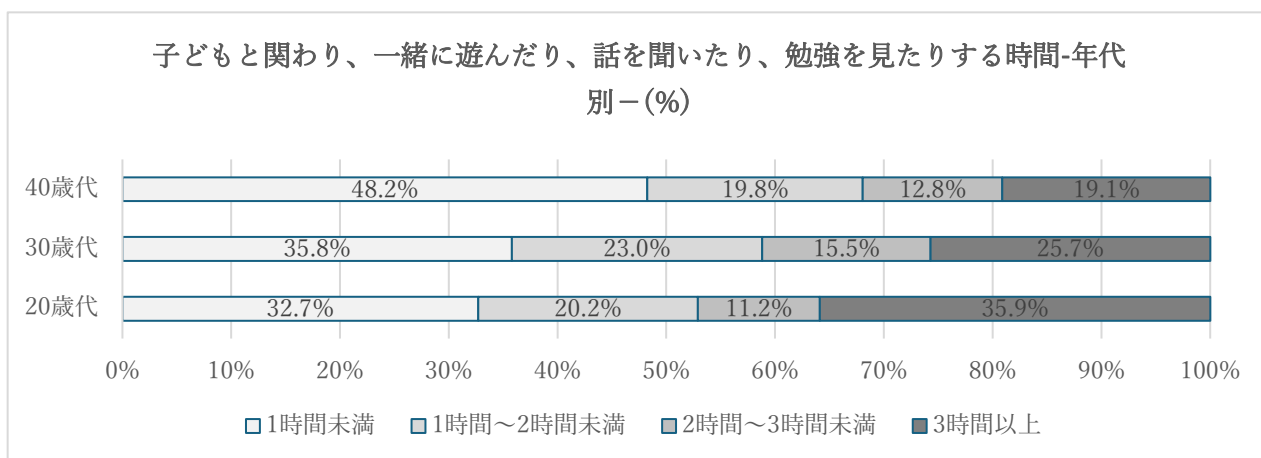
※平成28年=2016年

令和6年調査 回答者の職業 * Q2子どもと一緒に過ごす時間 Crosstabulation

% within 回答者の職業

		Q2子どもと一緒に過ごす時間			Total
		短時間	中時間	長時間	
回答者の職業	公務員	17.9%	42.9%	39.3%	100.0%
	会社員(事務系)	19.8%	55.4%	24.8%	100.0%
	会社員(技術系)	12.7%	65.1%	22.2%	100.0%
	会社員(その他)	14.6%	53.1%	32.3%	100.0%
	自営業	25.0%	50.0%	25.0%	100.0%
	自由業		66.7%	33.3%	100.0%
	専業主婦(主夫)	11.5%	35.4%	53.1%	100.0%
	パート・アルバイト	14.1%	48.9%	37.0%	100.0%
	その他	14.3%	28.6%	57.1%	100.0%
	無職	12.5%	37.5%	50.0%	100.0%
Total		14.0%	45.8%	40.2%	100.0%

👉年代が上がると短時間層が総体的に高くなる。その背景として、①おそらくわが子が次第に自立的になり、関わりが少なくても問題がないと意識されるようになること、②パートなどに関わるが増えることが推察できる。

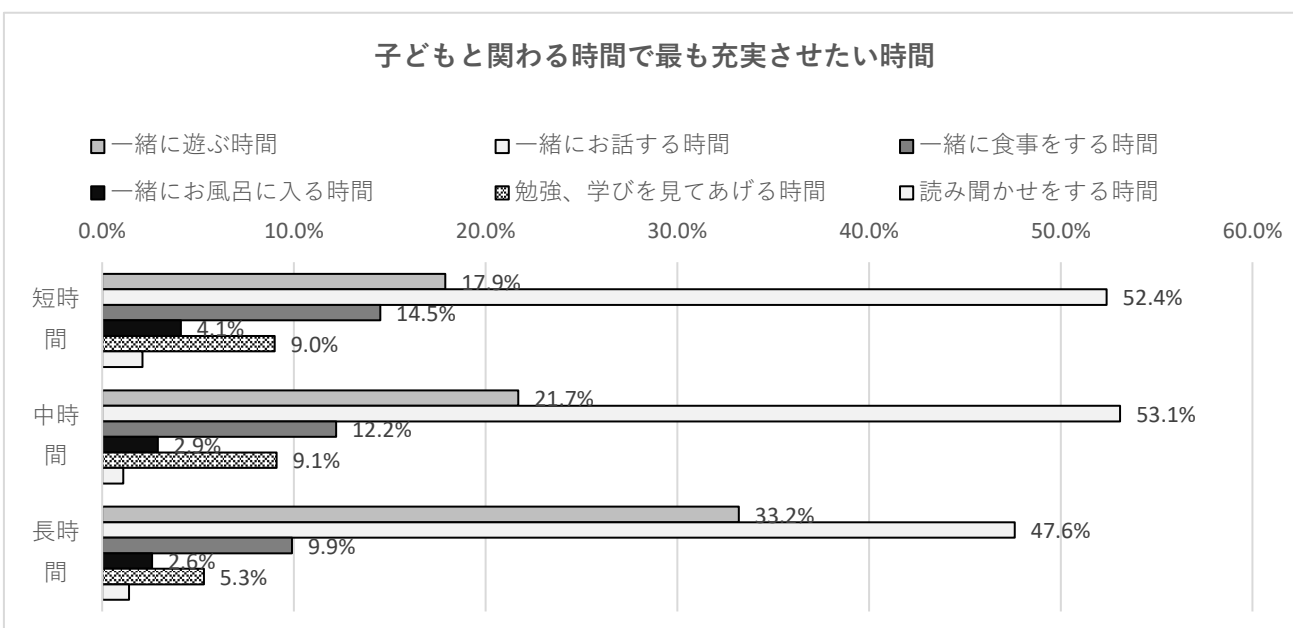


2. 関わり「短時間層」特徴

(1)「充実させたい時間」+「楽しむ時間」

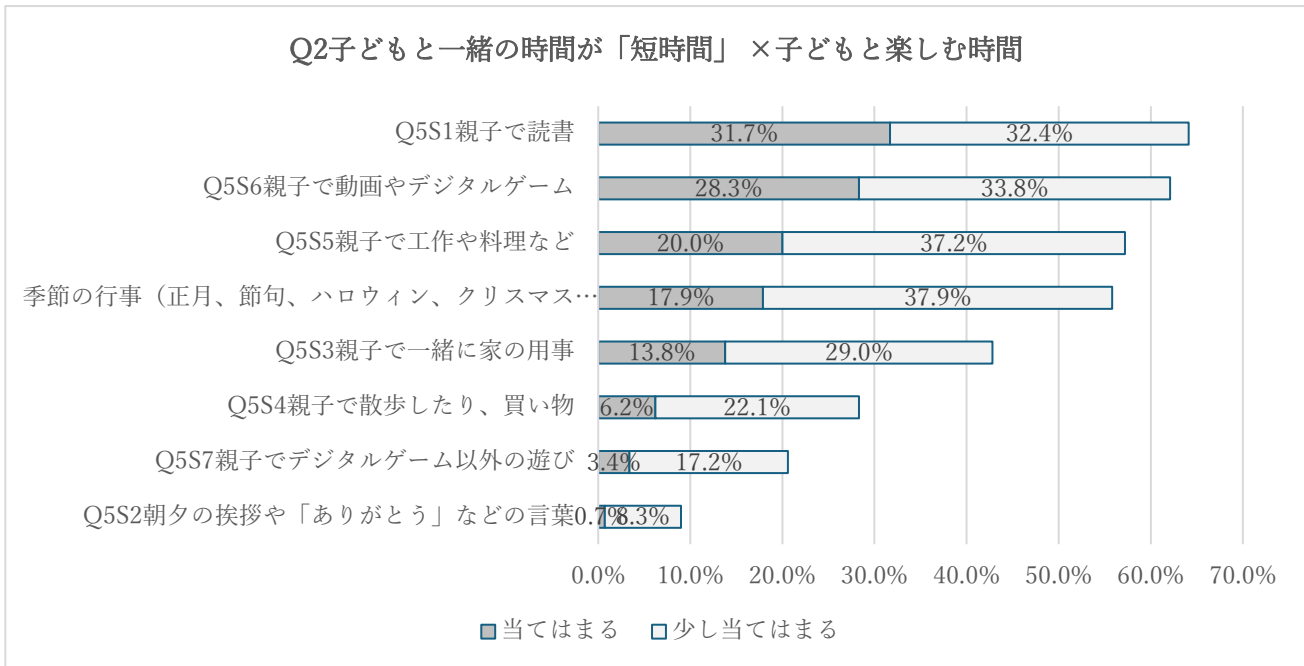
👉「子どもと関わる時間で充実させたい時間」については、「短時間層」は他の層に比べて、「一緒に食事」及び「一緒にお風呂」の選択率が高く、わが子への積極的な働きかけよりも、とにかく日常生活の中でわが子と時間を共有することを求める傾向にある。

また、「短時間層」では、「勉強、学びを見る」も長時間層よりも若干高いが、このことは「子どもにできて欲しい」ことの中で「勉強や習い事への取りかかり」を選択率が高いことと関連し、「勉強・学び」に関してわが子が期待通りに動かないことから、これを充実させたいと考えているのであろう。



👉 「子どもと楽しむ時間」については、「短時間層」では、「親子で読書」「親子で動画やデジタルゲーム」「親子で工作や料理」など「親子で読書」「親子で動画やデジタルゲーム」「親子で工作や料理」などが比較的肯定値が高いが、他の時間帯に比べると肯定値が低くなる。

※関連データ：「関わり時間別基礎データの Q5」「子育て意識・状況調査分析のシート 24」



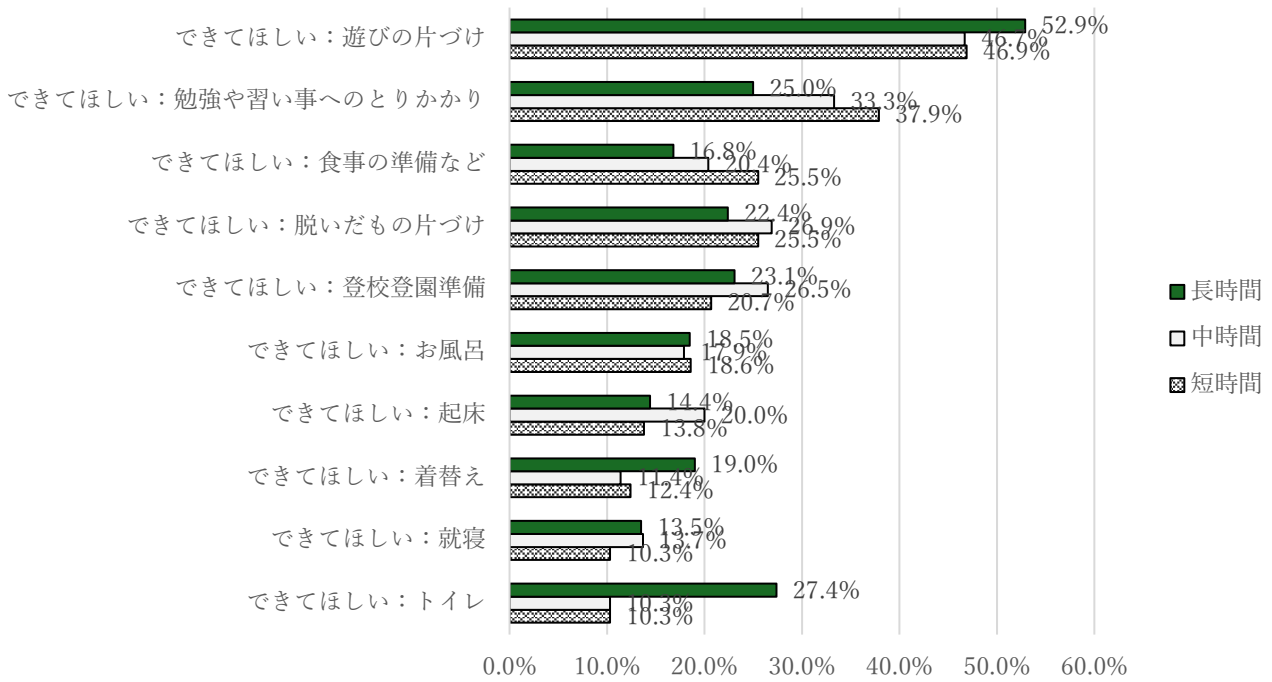
(2)わが子に「できて欲しい」こと

👉 「子どもにできて欲しいこと」については、「短時間層」では「勉強や習い事への取りかかり」「食事の準備」などが総体的に高い回答率になる。「長時間層」で比較的高い「遊びの片付け」「着替え」「トイレ」などの基本的な生活習慣に関しては「短時間層」では比較的低くなっている。「短時間層」の子は、日頃から親との接触が少ないことから、「長時間層」の子に比べてむしろ自立できていることが考えられる。

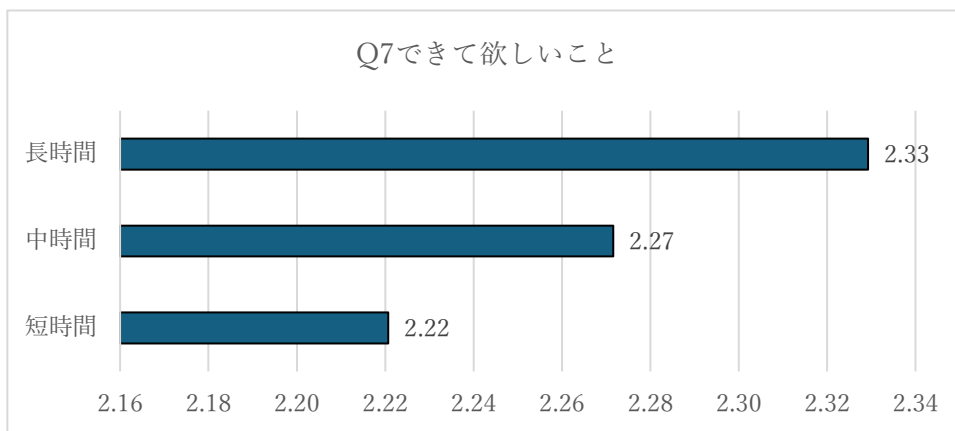
👉 「できて欲しいこと」に関しては、「短時間層」「中時間層」「長時間層」の順に肯定値が高くなる(非有意)。見方を変えれば、「できて欲しいこと」が多いほどわが子の自立性が高くないことを表すと解せられる。したがって、①「長時間層」の子ほど自立性が弱く、「短時間層」の子はある程度自立できていると解することもできるが、②解釈を変えれば、長時間になるほどわが子の様子をこまめに見ているが、短時間になると「できて欲しいこと」を見逃す傾向もあると考えることもできる。

※関連データ：「関わり時間別基礎データの Q7」「子育て意識・状況調査分析のシート 100」

子どもにできて欲しいこと



Q7できて欲しいこと



(3)わが子への声かけ

👉 子との関わり「短時間層」は、「助長声かけ」よりも「命令声かけ」が多い傾向にある。命令声かけは、長時間層、中時間層、短時間層の順に肯定値が高くなる傾向にあり、これとは対照的に「助長声かけ」は短時間層、中時間層、長時間層の順に肯定値が高くなる。短い時間中では、目にとまった問題点に、つい注目が向かうためだと考えられる。

※関連データ：「関わり時間別基礎データの Q14」「子育て意識・状況調査分析のシート 86～88」

「命令声かけ」下位尺度	
声かけ：勉強しなさい	
声かけ：早くしなさい	
声かけ：いうこと聞きなさい	
声かけ：なんでできないの	
声かけ：しっかりしなさい	
「助長声かけ」下位尺度	
声かけ：えらいね	
声かけ：ありがとう	
声かけ：がんばったね	
声かけ：すごいね	
声かけ：やればできる	

	子との関わり時間	N	Mean	
Q14命令声かけ	短時間	145	1.28	>長時間**
	中時間	475	1.11	
	長時間	416	0.84	
	Total	1036	1.03	
Q14助長声かけ	短時間	145	1.20	<中・長時間**
	中時間	475	1.54	<長時間**
	長時間	416	1.94	
	Total	1036	1.65	

(4)子を「褒める／叱る」

☞子どもとの関わりが長い保護者は短時間層よりも、よく「褒める」傾向にある。しかし、「叱る」ことについては、子との関わり時間による有意な数値差が見出されなかった。「短時間層」は、どうしても「気になる」ことに対して「叱る」形で接してしまうのであろう。

たお、「褒める」場合でも、「小さなことでもできるようになったことをほめて、親子で喜ぶ」では、関わり時間が長いほど肯定値が高くなり、わが子と接する時間が長いとじっくりとよい点を見出す余裕が生じることになるものと思われる。

※関連データ：「関わり時間別基礎データの Q17、18、8S4」「子育て意識・状況調査分析のシート 12～14、43、49、62」

Q2子どもと一緒に過ごす時間		どれくらい褒めているか				Total
		毎日のようにほめている	毎日ではないがよくほめている	たまにしかほめていない	ほとんどほめていない	
Q2子どもと一緒に過ごす時間	短時間	13.8%	49.7%	31.7%	4.8%	100.0%
	中時間	24.2%	55.2%	18.5%	2.1%	100.0%
	長時間	45.0%	45.7%	7.9%	1.4%	100.0%
Total		31.1%	50.6%	16.1%	2.2%	100.0%

Q2子どもと一緒に過ごす時間		どれくらい叱っているか				Total
		毎日のように叱っている	毎日ではないがよく叱っている	たまにしか叱らない	ほとんど叱らない	
Q2子どもと一緒に過ごす時間	短時間	46.9%	37.2%	11.7%	4.1%	100.0%
	中時間	40.0%	44.4%	12.6%	2.9%	100.0%
	長時間	47.6%	35.3%	14.2%	2.9%	100.0%
Total		44.0%	39.8%	13.1%	3.1%	100.0%

Q2子どもと一緒に過ごす時間		子との関わり：小さなことでもできるようになったことをほめて、親子で喜ぶ				Total
		できている	だいたいできている	あまりできていない	できていない	
Q2子どもと一緒に過ごす時間	短時間	21.4%	54.5%	21.4%	2.8%	100.0%
	中時間	35.6%	49.7%	12.6%	2.1%	100.0%
	長時間	49.5%	40.9%	8.9%	0.7%	100.0%
Total		39.2%	46.8%	12.4%	1.6%	100.0%

3. 関わりが短い中でも、良い親子関係を築くためのポイント

親子の関わり時間が短い中でも、良い親子関係を築くためにはどのようなことが考えられるか。

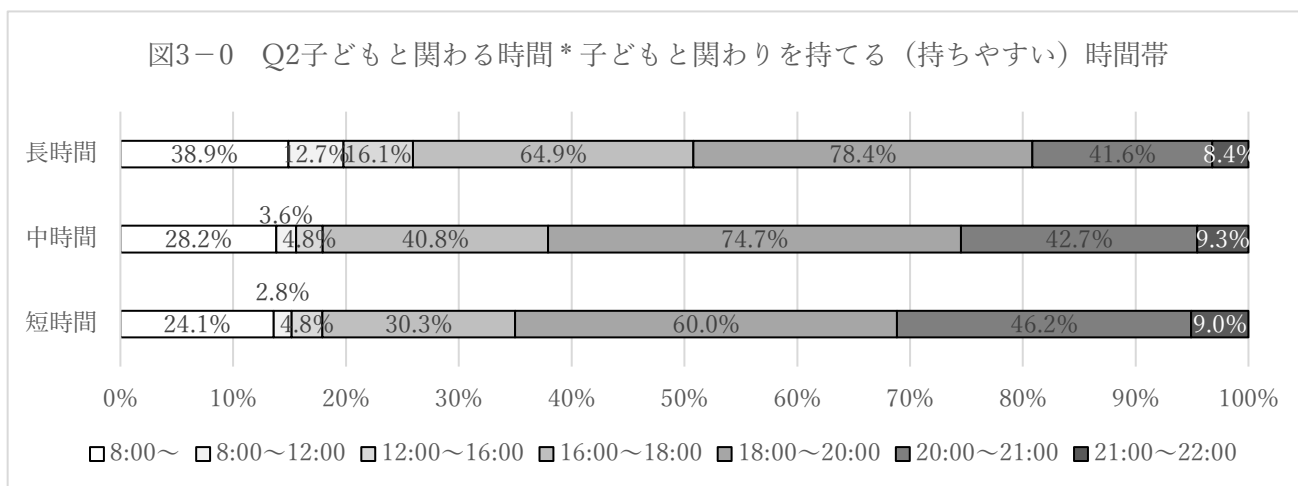
本調査項目のうち、子どもの反応に関する以下の項目を取り上げて、子どもへの関わり方との関係を見出すことによって、良い親子関係を築くためのポイントについて述べてみたい。

- ①子どもは悩みなどを話し、相談してくれるか。
- ②子どもの落ち込みや悩みなどの変化に気づきやすいか。
- ③子どもと交わす約束を子どもは守っているか。

加えて、④「子どもにできるようになって欲しいこと」の変数も取り上げてみる。

以上の分析に入る前に、関わり時間の違いによる「関わりを持てる／持ちやすい時間」について分析した結果が図3-0である。複数回答のため、%の合計値が100%を超えるが、「短時間」では「20:00～21:00」の時間帯が他よりも多く、「8:00～」が最も少なくなっている。また、回答の合計値は「長時間 251%」「中時間 204.15%」「短時間 177.2%」となり、「短時間」は仕事などの関係で、そもそも関わりの持てる複数の時間帯が選択しにくいためである。

※関連データ：「関わり時間別基礎データの Q3」「子育て意識・状況調査分析のシート 98」

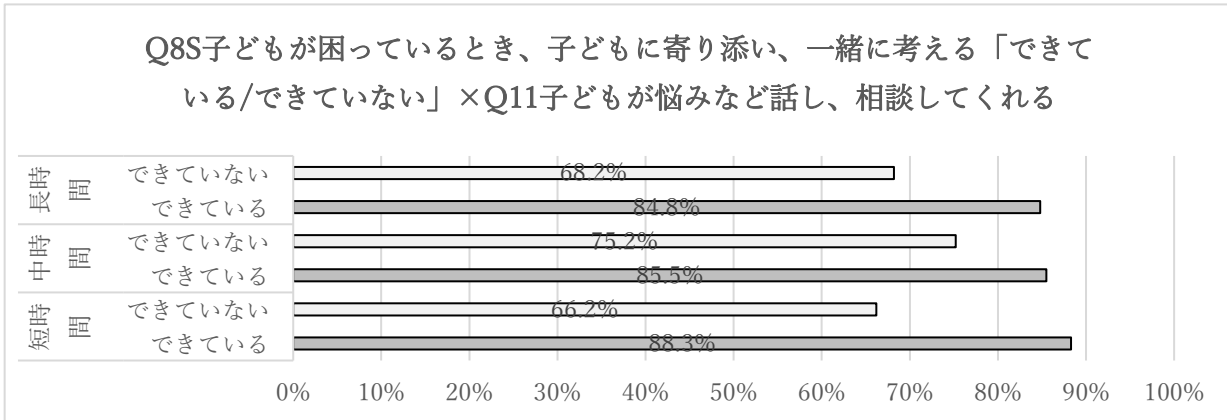


以下、声かけの在り方(助長的声かけ、命令的声かけ)との関係を探っていく。

(1) 「子どもは悩みなどを話し、相談してくれるか」

この変数に関しては、声かけとの関係が見出されなかったことから、「子どもが困っているとき、子どもに寄り添い、一緒に考える」との関係を探ると、時間の長短に関係なく、「子どもに寄り添い、一緒に考える」ことが「できている」方が「子どもが悩みなど話し、相談してくれる」の肯定値が高くなっている。

※関連データ：「子育て意識・状況調査分析のシート 39」



→たとえ関わり時間が短くても、子ども寄り添い・一緒に考えることが子どもの悩みなどを発見しやすいと言えよう。

(2) 「子どもの落ち込みや悩みなどの変化に気づきやすいか」

※以下の「声かけ得点」は0点～3点となっているが、「結構行っている」「ある程度行っている」「あまり行っていない」「行っていない」を意味する。

※関連データ：「子育て意識・状況調査分析のシート 87」

0点 Q7で「助長の声かけ（または命令の声かけ）」の選択肢を選んだ数。

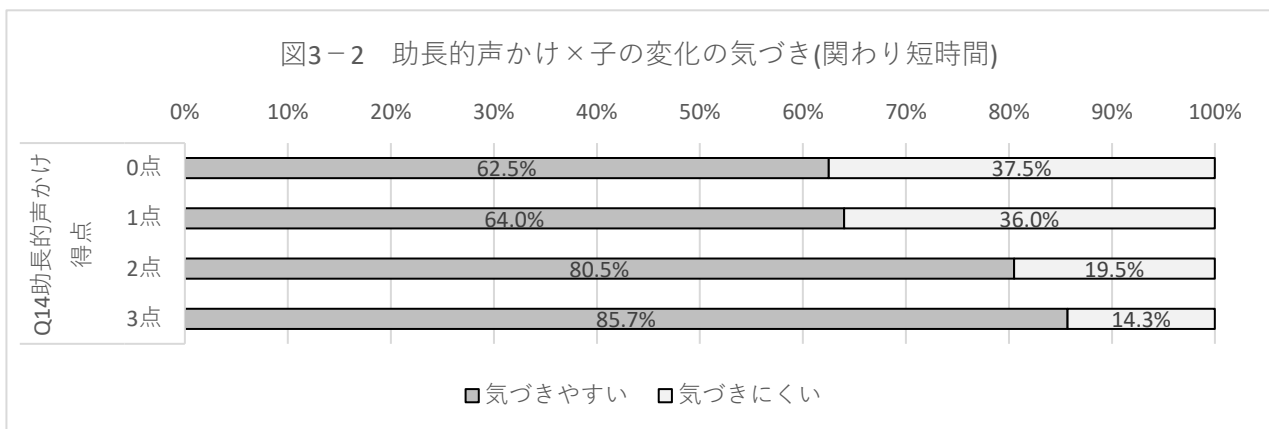
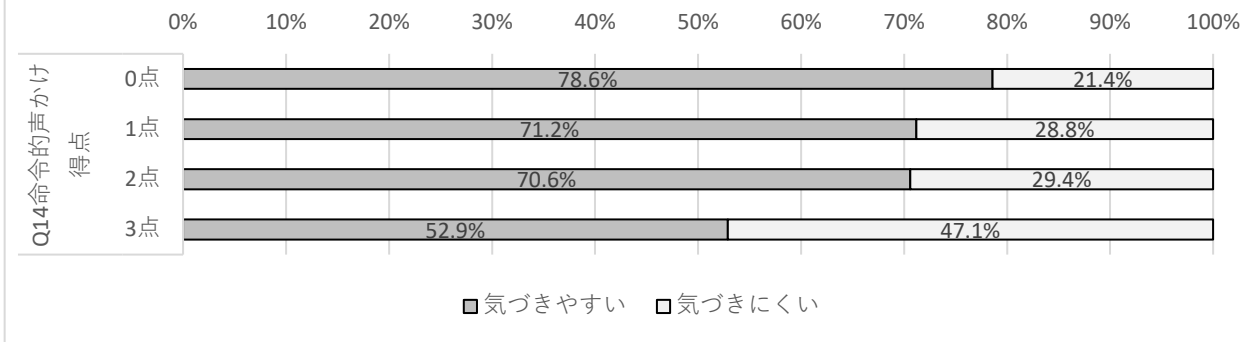


図3-3 命令的声かけ×子の変化の気づき(関わり短時間)



・「短時間」に限ると、「助長的声かけ」を行っているほど「子の変化」に気づきやすい傾向にある。「気づきやすい」の回答は「3点 結構行っている」が85.7%に対して、「0点 行っていない」は62.5%に留まる。したがって、子どもに対して「頑張る」などの助長的声かけを行うほど子どもの変化に気づきやすくなり、このことは関わり時間の長短に関わらず指摘できる。

・一方、「命令的声かけ」の場合は「助長的声かけ」と対照的な結果になり、「命令的声かけ」を行わない方が「子どもの変化」に気づきやすいという結果になった。

➡命令的声かけよりは助長的声かけを行っている方が子ども変化に気づきやすいという結果が得られた。

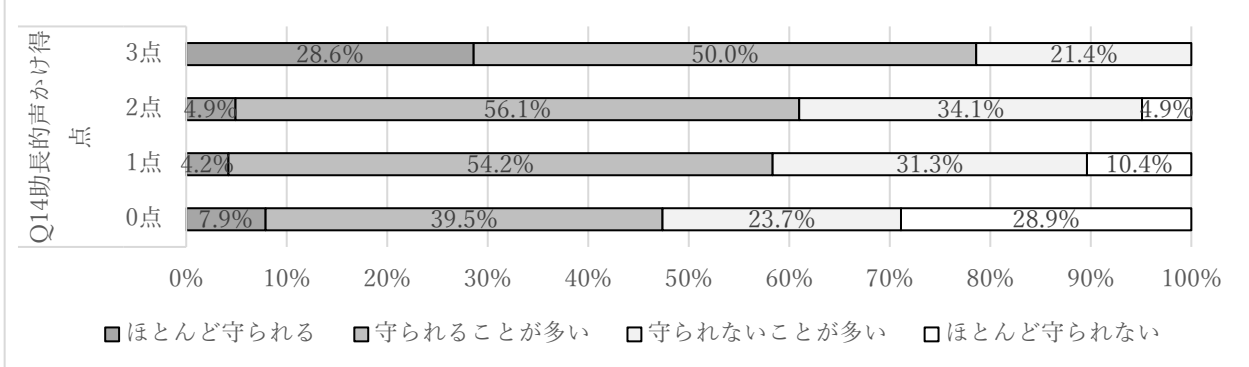
(3)子どもと交わす約束を子どもは守っているか。

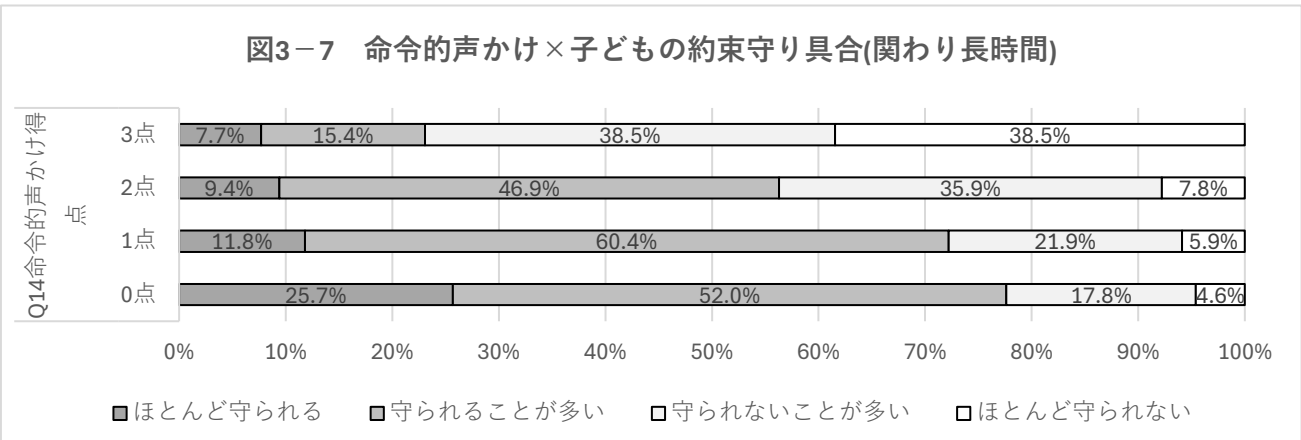
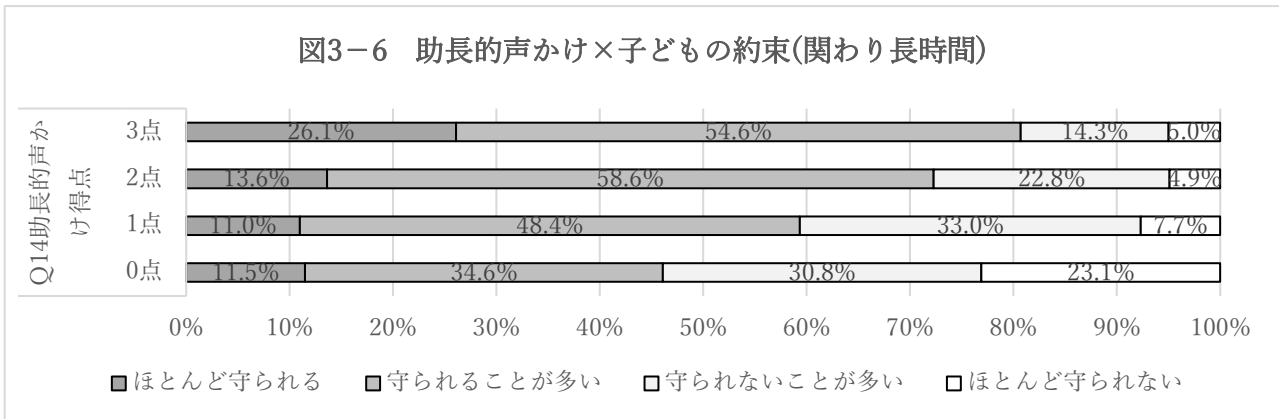
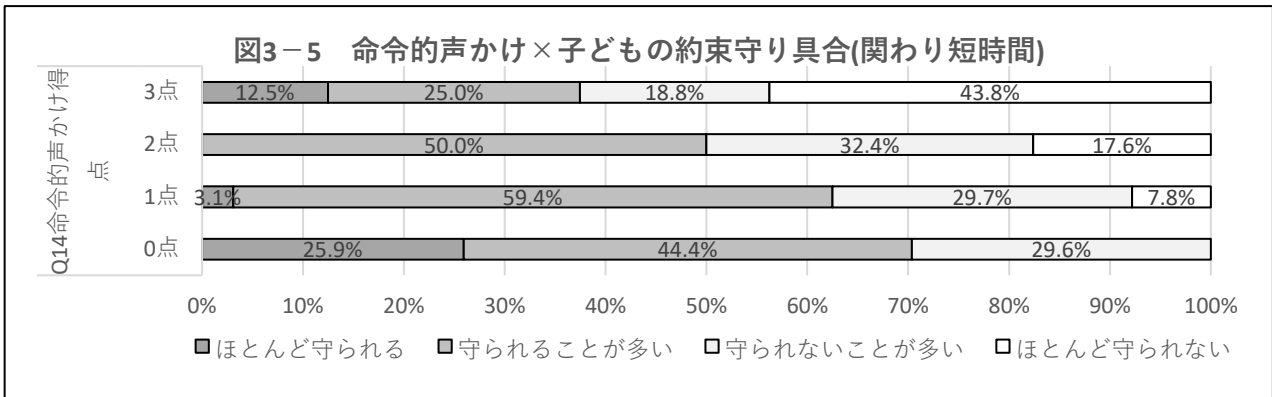
「子どもは約束を守っているか」については、前述と同様に、助長的声かけが多い方が「守られている」の回答が多い傾向にあり、命令的声かけはこれとは反対の結果になる。

➡子どもが約束を守るか否かは声かけの在り方に関わり、助長的な声かけの方が子どもの規範意識にプラスの影響を及ぼす可能性があると言える。この場合も、「長時間」でも同様の結果になっている。

※関連データ：「子育て意識・状況調査分析のシート 88」

図3-4 助長的声かけ×子どもの約束守り具合(関わり短時間)





(4) 「子どもにできるようになって欲しいこと」

次に、「子どもにできるようになって欲しいこと」に注目するが、この場合、「なって欲しいこと」が多いほど、自立性に劣るものと解釈し、その数が少ないほど子どもが自立的になっているという前提で分析を試みると、命令的声かけと助長的声かけの場合との数値が逆転し、図3-8に示したように、命令的声かけが多いほど「できるようになって欲しい」ことが多くなる傾向が見出された。「長時間」の場合(図3-9)も同様であり、関わり時間の長短に関係なく、助長的な声かけが子どもの自立心を促している可能性が指摘できる。

※できるようになって欲しい度：「多い」⇒Q7で選択肢を3つ選択、「少ない」⇒2つ選択、「ほとんどない」⇒1つ以下選択。

図3-8 Q命令の声かけ×Q7できるようになって欲しい度(関わり短時間)

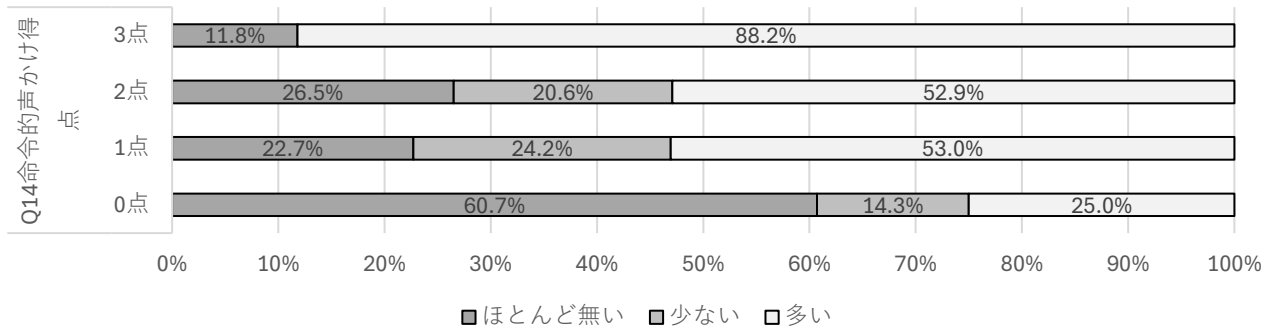
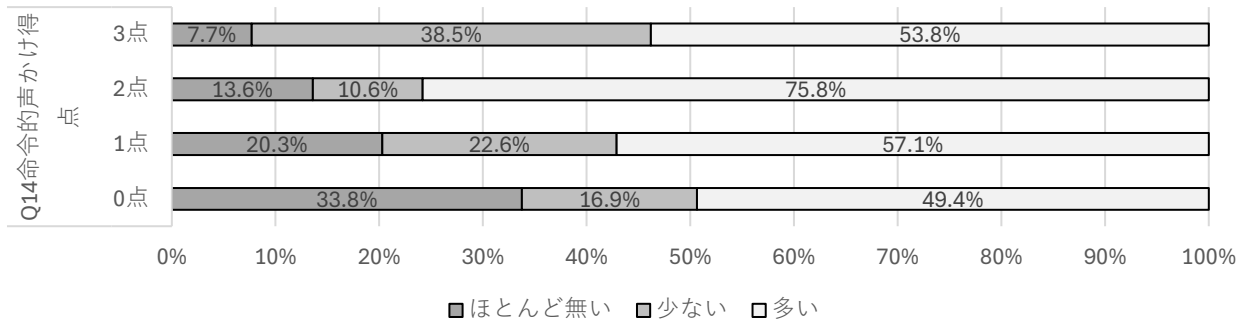


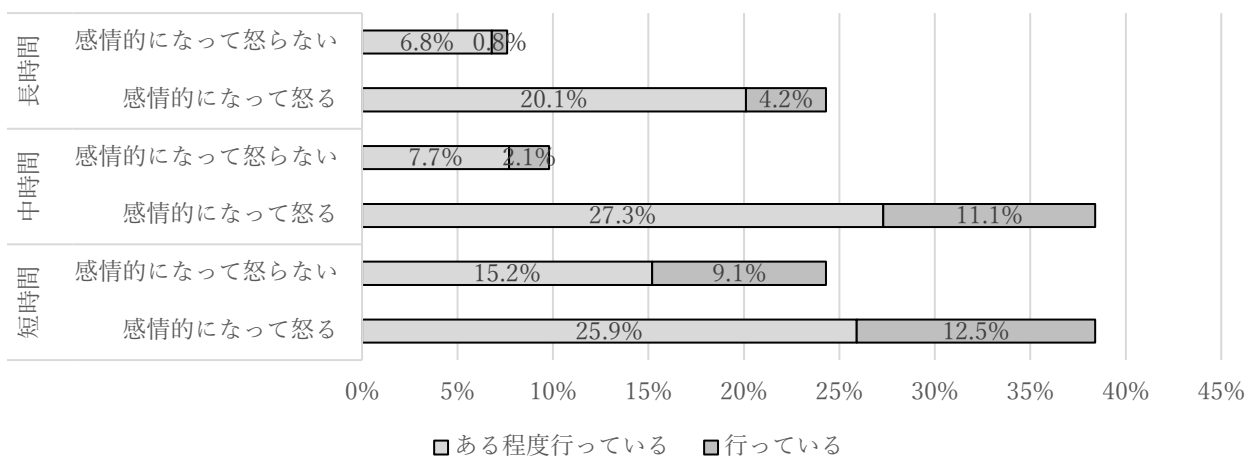
図3-9 Q命令の声かけ×Q7できるようになって欲しい度(関わり長時間)



(5)声かけの在り方と「感情的になって怒る」の関係

つい命令的な声かけになってしまうことと「感情的になって怒る」こととの関係を探ると、図3-10に示したように、関わり時間に関係なく、「感情的になって怒る」方が命令の声かけを行うようになる傾向が見出される。

図3-10 感情的に怒る×命令の声かけ



→子どもが言うことを聞かないと、つい感情的になり、命令的な指示を行うようになるのだろう。

👉 結論

(1)「子どもが困っているとき、子どもに寄り添い、一緒に考える」親の方が「子どもが悩みなどを話し、相談してくれる」傾向にあることから、日頃から子どもとの関わりにおいては、「寄り添い・一緒に考える」など深い関わり(換言すれば、「助長的な関わり」になる)が良い親子関係を築くことにつながると考えられる。このことは関わり時間が短くても見出される傾向である。

(2)関わり時間が「短時間」であっても、「命令的声かけ」(勉強しなさい、早くしなさい、いうこと聞きなさい、なんでできないの、しっかりしなさい)などの声かけを控え、「助長的声かけ」(えらいね、ありがとう、がんばったね、すごいね、やればできる)など励ましや褒めるなどのプラス面の指摘を行っている方がわが子の悩みなどの変化に気づきやすくなり、子が約束を守るなど規範意識を強める傾向が見られる。

(3)さらに、助長的声かけを行う方が「できるようになって欲しいこと」も少なく、命令的声かけよりも、助長的声かけの方が子どもの自立性を促す可能性がある。つまり、たとえ「できないこと」があっても、指示的・命令的に行動を促すよりも、励まし・支える働きかけの方がしつけの効果が得られると言えよう。このことも、関わり時間に関係なく見出される傾向である。

(4)つい命令的になってしまうことは感情的に怒ることと関係している。子どもが言うことを聞かなかったり、おかしいことをしでかしたりしても、感情的にならず、また指示的な働きかけをできるだけ避けることが望ましいと言えよう。

(5)以上から、望ましい親子関係を築くためには、命令口調にならず、励まし／褒めるなどの評価を行い、かつ感情的にならないように努めることが大切になる。また関わり時間が長くなくても、子どもに寄り添い・共に考えるなど「濃い」関係性を築くと、子どもが心を開くようになる **ことが** 解釈でき、かつ助長的な働きかけにつながると言えるのである。

[参考]

1. 保護者(女性)の子どもと触れあう時間

「子どもと関わり、一緒に遊んだり、話を聞いたり、勉強を見たりする時間」

